地球の未来と〈いのち〉を生かすために重要な仏教保育

――仏教の自然観・人間観から地球温暖化を考える――

佐藤　達全

1、はじめに（問題の方向性）

近年、地球温暖化に関連したテレビ番組や新聞記事をよく見かけるようになった。そして、これは決して「どこか遠い国のできごと」ではない。その理由は、日本でも温暖化が原因といわれる集中豪雨に見舞われたり、前例のない夏季の猛暑（註一）や海水温の上昇が起こったりして、農作物や漁業に大きな影響が生じているからである。さらに、大規模な山崩れや河川の氾濫によって生活環境が奪われたり、多くの人命が失われたりといった深刻な被害も急激に増加している。

しかも、こうしたできごとは偶発的な「自然災害」ではなく、産業革命以降の「人類が引き起こした人災」という指摘が大勢である。十八世紀にイギリスで始まった産業革命は、多くの人びとの生活に快適さと豊かさをもたらしたが、そこには石炭や石油などの化石燃料を大量に消費するために生じる重大な問題が潜んでいた。それが地球温暖化

である。地球上に生存しているのは人間だけではない。生物学者の研究によると七百万種類もの生物が存在するといわれるが、これは「地球が人間だけのものでない」ことを意味している。

歴史的にみても、四六億年前に地球が誕生してから人類の祖先であるホモ・サピエンスが登場したのはわずか二十万年前のことに過ぎず、彼らは採集や狩猟等によって得られた食物を食べて、慎ましく生活していた。一日の活動の大部分は、生きるために必要な食物を獲得するためであった。ところが、産業革命によって人間の生活は一変したのである。その結果、「地球上に存在する動物や植物・水や鉱物資源は〈人間が自由に使ってよい〉と思いこんでしまった」のではないだろうか。

人間が欲望の赴くままに大量生産や大量消費を続けた結果、思いもしなかった問題が発生し始めた。その一つが温暖化である。地球の平均気温は過去百年間に、〇・四度～〇・八度上昇したが、特に一九九七年以降の上昇が顕著で、このまま適切な対策を講じないと、百年後には一・四度～五・八度も上昇するといわれている。(註二)それゆえ、私たちが将来も安心して地球上に住み続けるには、人間を「特別な存在」と位置づけるのではなく、人間も「自然界の一員にすぎない」と考えて行動することが必要なのだが、それほど簡単ではない。なぜなら、そのためには大きな価値観の転換が求められるからである。

実際に、地球温暖化を防止するための取り組みについて、国連気候変動枠組み条約事務局からは二〇二三年十一月十四日に、「各国が独自に策定した温室効果ガスの排出削減目標を達成しても、二〇三〇年の排出量は一九年比で二％減にとどまる」との報告書が公表されている。それによると、温暖化対策の国際的な枠組みとしての「パリ協定」では、産業革命前と比べて気温上昇幅を一・五度以内に抑えるのが世界目標で、実現には十九年比四三％の削減が必要だが、目標とは大きな隔たりがあることが浮き彫りになったことからも、温暖化の防止がどれほど難しい課題であるかがわかるであろう。

けれども、ぐずぐずしている余裕はない。それは、このまま地球温暖化が続くと世界各地で砂漠化が進み、大規模な山火事や異常な干魃・洪水等による被害が拡大し、多くの人びとが深刻な食糧不足や水不足に見舞われる恐れが高まっているからである。ところが、このような状況を改善することは産業革命に牽引された欧米の価値観では対処できないと筆者は考えている。私たちが今すぐにでも取り組まなくてはならないことは、「仏教の生命観や世界観（諸法無我）に基づいた生き方を実践する必要がある」ことを世界に向かって強力に発信することである。そして、それと並行して将来の地球環境を守る人材育成のために、動物も植物も含めたすべての生命を尊重して「もったいないの心」を育む仏教教育（保育）を推進することではないだろうか。本稿では、そのような観点から仏教教育（保育）の重要性と、寺院住職が果たすべき役割について考えてみたい。

2、地球の環境問題への扉を開く

筆者が地球の環境問題を解決する手掛かりが仏教思想にあると考えたのは、仏教の「諸法無我」や「縁起」思想に注目したからである。そのことについて述べる前に、筆者の学問的な関心について記しておこう。筆者は高校卒業後は理系の大学への進学を考えていたので、二年生から理系のクラスで授業を受けていた。しかし、大学受験が近づいてきた頃、（信じていただけないかもしれないが）父親から「寺の後を嗣がなくてはならないのだから」と仏教学部以外の進学はすべて否定されてしまったのである。そのため、大学に入学しても授業への関心が湧かず、悶々としながら興味を持った分野の本を読み漁っていた。

そうこうするうちに一年が過ぎた。大学への進学は親の言いなりであったが、後を嗣ぐ時期を少しでも遅らせるために教員になることを思いつき（今思えば、教師を第一志望と考えている人に対して失礼なことであるが）、文学部国文学科で国語の教員免許取得に必要な授業を履修することにした。そこで出会った先生が指導をされていた中国文学ゼミに

参加したことをきっかけに古代中国の食文化に興味を持ち、そこから仏教の「不殺生戒」や「生命観」や「環境問題（汚染）」へと関心が広がっていったのである。

また、中世文学の教授の「これからの時代に高校教諭をめざすなら、修士課程で勉強することが必要になる」という言葉に触発されて大学院に進学した頃、日本におけるロボット工学の第一人者であった森政弘・東工大教授の話（TBSラジオ番組「話のサイドミラー」で、パーソナリティ片山龍二氏との対談・毎週金曜日放送）を聞く機会（約一二〇回）を得た（この放送内容は、後に時事通信社から『やわらかい頭』一九七二年五月・『続やわらかい頭』一九七二年十二月・『続続やわらかい頭』一九七三年十一月として出版された）。

その話の中で、森先生の「ロボットの研究に最も役立つのは仏教の思想です」という言葉がきっかけになって、〈理系崩れの〉筆者は仏教の生命観に関心を向けるようになったのである。付け加えておくと、森先生は東工大を定年退官した後に、日本人学生の発想力を豊かにしないと世界に太刀打ちできないという考えから、三大学の学生（東京大学・マサチューセッツ工科大学・北京大学）を集めたロボットコンテストを始めた。現在は高専の学生を対象にした全国大会に変わっている。

さらに、当時の日本は高度経済成長で経済活動に活気があったが、その一方で公害や環境汚染の問題が深刻になっていた。（註三）そのほかにも、光化学スモッグ・アトピー・川崎公害・六価クロム等等、経済成長の陰で健康問題に悩む人びとが急増していたのである。そんなとき、筆者が出会ったのが『生と死の妙薬』（レーチェル・カーソン著・新潮社一九六四年）と『手をつなぐ生きものたち』（読売新聞婦人部編・読売新聞社一九七一年）であった。

『生と死の妙薬』は後に“SILENT SPRING”という英語の書名どおり『沈黙の春』として再出版されたが、人間による環境汚染を世界で最初に告発した名著と言われる。筆者の手元には一九八七年に発行された『沈黙の春』と並んで一九六四年発行の随処に赤線が引かれた『生と死の妙薬』がある。第一章には「明日のための寓話」という題で『沈

黙の春』という書名のいわれが次のように書かれている。

アメリカの奥深くにわけ入ったところに、ある町があった。生命あるものはみな、自然と一つだった。町のまわりには、豊かな田畑が碁盤の目のようにひろがり、穀物畑の続くその先は丘がもりあがり、斜面には果樹がしげっていた。春がくると、みどりの野原のかなたに、白い花のかすみがたなびき、秋になれば、かしやかえでや樺が燃えるような紅葉のあやを織りなし、松のみどりに映えて目にいたい。（中略）

ところが、あるときどういうわけか、暗いかげがあたりにしのびよった。いままで見たことも聞いたこともないことが起こりだした。どうしたことか、若鶏はわけの分からぬ病気にかかり、牛も羊も病気になって死んだ。どこへいっても、死の影。農夫たちは、どこのだれが病気になったというはなしでもちきり。町の医者は、見たこともない病気があとからあとへと出てくるのに、とまどうばかり。そのうち、突然死ぬ人もでてきた。何が原因か、いまもって分からない。大人だけではない。子供も死んだ。元気よく遊んでいると思った子供が急に気分が悪くなり、二、三時間後にはもう冷たくなっていた。

自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思った。裏庭の餌箱は、からっぽだった。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶる体をふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、こまどり、すぐろまねしつぐみ、鳩、かけす、みそさざいの鳴き声で春の夜は明ける。そのほかいろんな鳥の鳴き声がひびき渡るのだった。だが、いまはもの音ひとつしない。野原、森、沼地――みな黙りこくっている。（後略）

同じ頃、読売新聞社から『手をつなぐ生きものたち』という、新聞記事（「婦人と生活」欄に一九七〇年十月二日～十二

月十九日まで五七回連載）を基にした単行本が出版された。この興味深い書名の意味するところは、この本の「まえがき」に記された次の文章からうかがい知ることができる。

私たち人間をふくめて、自然はどんなふうに〝生きて〟いるのだろうか。自然が自然として存在するために、地球上の生きものたちはどういうふうに生活し、それらと私たち人間はどうかかわり合っているのだろうか。自然は破壊されたといわれます。だから、復元しなければ、と叫ばれています。が、それはそれとして、自然とは、いったい何なのだろう。もともとどうなっていて、いまはどうなりつつあるのだろう。そういうことをじっくり考えてみるのも、反省の年にあたって意味のないことではあるまい。そんな気持ちから生まれたのが、この『手をつなぐ生きものたち』です。（二ページ）

新聞の「婦人と生活欄」に掲載された内容であることから、取り上げられた生きものや内容が身近なものでとても興味深い上に文章も読みやすく書かれているので、その一部を紹介しておく。第一章の「土の中」には、先ず「リンゴ園ミステリー」という見出しでクワコナカイガラヤドリバチが登場する。この虫は体長がわずか一ミリの超ミニ・バチで歩くだけで飛ぶことができないが、リンゴの木を傷めたり実にシミをつけて売り物にならなくしたりするカイガラムシを退治するチャンピオンで、製薬会社から売りだされているそうである。

長野県立園芸試験場の病害虫部長の「二十年前、農薬が出まわる前にはリンゴの害虫も三十種。学問的にいえば二百種以上もいましたがねえ。そのかわりそれをやっつける天敵もいてバランスがとれてたわけですな。もちろんカイガラムシの天敵もいましたよ。それがいまは害虫は五、六種に減ったけれど、残ったのは強いやつばかり。農薬のおかげで天敵の方が先に参っちゃったんですなあ」という見解を紹介した後でこの項は次のように締めくくられている。

かつては、つぎつぎに農薬を作り、太陽の下で飛びかう虫を殺した会社が、いまは暗い一室の中で懸命に虫を作る。自分の手で自然の仕組みをこわしてしまった人間たちがいまはもとの仕組みを取り戻すのに懸命になっている。「オロカな人間たち」と、どこかでだれかが笑っていそうな気さえする。

自然の中で、生きものたちは食ったり食われたり、攻撃したり助け合ったりしながら、うまいぐあいに全体のバランスをとり、自然の摂理にしたがいながら手をつないで生きている。〝手をつなぐ生きものたち〟のそのつないだ輪を、いま、人間たちがこわしている。文明の進歩だの産業優先だのと、自分勝手な名目をつけて自然を破壊し、公害をまき散らしている。その結果自分のいのちまで危なくなった。（一八～一九ページ、傍線は筆者）

と、人間の行為を批判している。

二番目には、耕耘動物としてミミズが登場する。ミミズは土を肥やし、草花や木や畑の作物を自然のうちによく育てるという大事業をしている。黒々とよく肥えた土の中には数多くのミミズが生息しているが、痩せこけた土の中のミミズの数は多くないそうである。ミミズが土を肥やす仕組みについて次のように書かれている。

ミミズのおなかの中は土だらけである。（中略）土といっても、ただの土ではない。落ち葉、ゴミ、堆肥がたっぷりまざった栄養満点の土である。太陽光線をたっぷり取り入れ、地上の炭酸ガスを吸って炭水化物をたくわえた葉は、地上に落ちると、土の表面や土の中にわんさと住んでいる微生物たちの働きで分解し、植物の栄養分になってふたたび植物に吸収される。この落ち葉を細かくくだいて微生物が働きやすいように助けるのがミミズなのである。（中略）

ミミズたちは、食べた量の八五パーセントを外へ出す。京都の北桑田郡に京都大学付属蘆生演習林がある。そこに多く生息するクソミミズの糞を調べたところ、ミミズが最も活躍する春から秋までの六か月間で、一ヘクタール当たりにミミズが地表に盛り上げた糞土量は多いところで六一トン、少ないところでも二、三トンに上ったという。

ミミズがのみ込んだ落ち葉やゴミは、ミミズのおなかを通る間に粉々に分解され、土と十分ミックスされる。土はやわらかくふっくらと耕され、空気や水をよく通す申し分のない土になって、おなかから外へ出る。

それば かりではない。地下三十センチも穴を掘り、せっせと往復しているうちに地表の糞土と地下のやせた堅い土とがまざり合い、下の方までじっくりと耕されて栄養分がゆきわたる。こんな土の中でなら、植物の根は毛のように細くても四方八方へ深々とひろがって、たっぷり栄養を吸い取ることができる。（二二〜二四ページ）

どの部分を読んでも、小さな虫が担っているとても大きな役割に驚かされる。もう一種類だけ紹介しておこう。三番バッターはダニである。ダニは「嫌われ者の代表」のように考えられているが、それとは全く異なった「愛すべき生きもの」であることが分かる。

青木淳一さん（国立科学博物館勤務）は、ダニ博士である。（中略）

ダニの中には、人や動物の血を吸うダニや食品につくダニのように、たしかに困ったヤツもいる。だが、青木さんの研究しているのは〝益ダニ〟である。ミミズ同様、植物を育て、大地を肥やす、地球の〝小さな恩人〟たちである。

その名はササラダニ。小は〇・三ミリから大きい方でもせいぜい一ミリ半という小さなからだの内側に、竹の先

を細く裂いて作ったササラ状の毛をつけている。ラテン語や英語では「森の散歩人」とロマンチックな名前で呼ばれているように、この連中のすみかは、落ち葉のつもる森の中や草原の枯れた草の下。もちろん、お宅の庭にだって、植木や草花や芝生さえあれば、地表に近い土の中で平和に暮らしているはずである。

もともと、ダニがこの地球上に姿を現したのは、いまから三億五千万年前も昔の石炭紀。ようやく両生類やこん虫、クモ類が現れたころである。

血を吸うにも相手のいない時代だから、当然吸血ダニもいなかった。きらわれものの寄生ダニは、それから三億年近くたって哺乳類が現れたあと、初めて動物に寄生するように進化した、いわばダニ社会の新参者である。世界に一万種もいるというダニ全体からみれば、こんなイヤな連中はわずか五、六パーセントにすぎない。残る九十四、五パーセントのダニたちは、いまも森や庭の茂みの中で太古の大森林の中でと同じように暮らしている。もっとも、同じササラダニでも、種類によってそれぞれに好きな木や草がある。（中略）

顕微鏡でしかみられないダニのそのまたフンといえば、吹けば飛ぶようなものだけれど、何しろ、ちょっとした森なら一平方メートルに三万匹、多いところでは十万匹近くも住んでいる。それが、からだのわりには大きな丸い球を作っては盛り上げるのだから、平地でもミミズにつぐ耕作者。土と栄養分とをまぜ合わせる自然のミキサーなのである。場所によっては、次に登場するトビムシとともに、大地を肥やすトップバッターの働きをしているのである。（二六〜二九ページ）

このように、土の中の生きものの姿がわかってくると、次第に生物の世界に引き込まれていくが、第二章のテーマは「食う食われる」で、前章以上に興味を引かれる内容が紹介されている。ただ、これまでの引用が長くなってしまったので、ここでは二つのことがらだけを紹介するに留めておく。

面白いことに、春先、毛虫やイモムシが大発生すると季節は、ちょうど鳥たちの繁殖期である。葉っぱに群がる毛虫たちを親鳥はせっせと取り集めて巣に運ぶ。秋は秋で、巣立ったヒナや延々と繁殖を続けるルリビタキたちが、クモの大群をちょうだいする。もしも鳥たちが、こうして大々的な毛虫狩りやクモ狩りをしなかったら、森は毛虫やクモで満ちあふれ、やがては地球上にあふれるにちがいない。鳥たちは、それぞれの好みにしたがい、自分の腹ぐあいに従っているだけなのに、それがまた地上の虫たちをちょうどいいぐあいに間引いてくれているのである。（七四ページ）

ともあれ、地上では、生きている木の葉の中にある澱粉とほんの少しの植物蛋白質を食べて、ハムシが動物蛋白質を作り、それを太陽エネルギーといっしょにこん虫から鳥へ、鳥からヘビや哺乳類へと引き継いで、ふたたび地下のカビやバクテリアを通して植物へ戻る。地下では地下で、枯れた落ち葉の中の澱粉と蛋白質をミミズやダニや線虫が食べて、この連中の体の動物蛋白質を作り、それがモグラや鳥に食べられて地面の上の〝食う食われる〟の流れに合流し、ふたたび地中に戻る。（中略）

人間だって例外ではない。万物の霊長などといって、自分だけは別ものみたいな顔をしているが、同じ地球に住む生きものである限り、この大きな流れの環からはずれることはできない。そしてもし、人間たちが勝手にこの環のどこかを断ち切れば、生きものの世界の秩序はたちまち狂ってしまう。自然の林や山を切り開いて道路や工場や宅地を作ったために、生きものが死に絶えたり、雑木林がカラマツの植林に変わって好物の雑木の芽がなくなったために、エサを求めてクマやイノシシが人家まで迷い込んでくるのもこのせいである。

またもし、もともとこの自然の環の中にはない物質を大量に流し込めば、さすが働きもののカビやバクテリア

も完全にお手上げで、流れはそこでストップする。やがてはそこからあふれ出して、あたりに大混乱を引き起こす。ヘドロや亜硫酸ガスや水銀や洗剤など、およそいま問題になっている公害という公害はみなそのせいだし、ゴミ捨て場で処理に困っているビニールやプラスチックにしてもそうである。

自然の仕組みに勝手に手出しした人間たちは、いまそのゴウマンさの仕返しを受けている。（一二二～一三三ページ、傍線は筆者）

3、『肉食の思想』から考える環境問題

すでに指摘したように産業革命以降、人類は豊かで快適な生活を実現するために大量の化石燃料を消費し続けてきた。その影響の一つが地球温暖化である。すでに世界各地でさまざまな被害が発生していて、その状況は年々深刻の度を増している。だが、化石燃料に関しても産油国と消費国とでは受けとめ方が異なっているし、被害の発生状況も国によって一律ではない。さらに、それに代わる代替エネルギーの見通しも十分ではない。こうした状況が重なって、温室効果ガスの削減は進んでいない。

ここでは、政治体制や経済政策について論じるのが目的でないため、そのことには触れないが、国連のアントニオ・グテレス事務総長が「温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が来た」と言ったように、二〇二三年は世界平均で最も暑い夏になり、異常な高温が世界各地で記録された。アメリカや中国の一部では五十度を超えたし、イタリアやギリシャでは四十度を超える記録的な暑さが続いた。

カナダでは大規模な山火事が頻発し、ブラジル・アマゾンでは異常な干魃が発生している。北アフリカ・リビアでは洪水が甚大な被害をもたらし、南極では冬の海氷面積が最小を更新した。世界人口の四割以上に当たる約三三億～三六億人が、気候変動の被害を受けやすい環境下での生活を余儀なくされ、アフリカやアジアなどで悪影響が深刻に

なっているという。（註四）

これまで紹介したように、世界各国の自然環境が異なるから温暖化による被害の発生状況が国によって同じでないのは当然である。また、産油国と輸入国とで化石燃料に対する考え方は異なるし、それぞれの国の政治体制や経済状況によって、温暖化への対応は大きく隔たっている。ただし、『沈黙の春』と『手をつなぐ生きものたち』で明らかなように、国や民族が異なっていても、地球上で生活している人間は「みんなつながっている」ことは否定できない。空気や水に「国境はない」のである。

それでも、人間は自分が拠り所にしている思想や宗教に絶対的な信頼をおいて考えたり行動したりしているのではないだろうか。

そのような中で、筆者が環境問題の解決策を仏教思想から考えようとしたのには理由があるので、先ずそのことを紹介しておきたい。すでに述べたように、仏教学部に入学して悶々としながら読んだ本の一冊に、和辻哲郎（註五）の『風土』（筆者が読んだのは一九六七年に岩波書店から発行された第三十三刷であるが、第一刷は一九三五年に発行されている）があった。和辻がドイツに留学するために乗った船がインド洋を通過する間に、真新しい行李（その当時に用いられていた旅行用の荷物を入れるための竹や柳で編んだ大型の荷物入れ）の四隅に付いている金具が錆びてしまったこと（それほどインド洋の温度や湿度が高いのである）や「ヨーロッパには雑草がない」（温度や雨量が日本と異なること）等の記述に筆者は強烈な驚きを感じた。

『風土』の影響を受けて読んだのが、ヨーロッパ中世史を専門とする鯖田豊之（当時は京都府立医科大学助教授）の『肉食の思想』（中央公論社・中公新書一九六九年）である。その中に「日本では肉食はぜいたく」という記述があった。現在の日本ではステーキを食べることは日常的だが、この本の初版は今から50年以上も前の一九六六年である。筆者は一七六ページの新書版『肉食の思想』を、和辻の『風土』に描かれた文章を思い起こしながら一気に読み終えた。

実は、畜産物を食べるのがぜいたくだというのは、食用作物の十分にとれる耕地をわざわざ割いて、飼料作物を人工的に栽培した場合のことである。もし、家畜が、そこらに勝手に生える、食用にならない草のようなもので育つぶんには、肉食はすこしも不経済ではない。ヨーロッパ人の家畜飼育は、もともと、そういうところからでてきたのである。日本とは、だいぶ事情がちがう。（二八ページ）

と、なかなか興味深い記述が展開されている。それ故、和辻は『風土』の中で「ヨーロッパには雑草がない」と表現したのであろう。鯖田の興味深い記述はまだまだ続く。

いずれにせよ、ヨーロッパには、日本の雑草のような、徒長して家畜の歯にあわないほど茎のかたくなる、何の役にもたたない草は存在しない。そこでは、ひとりでに生える草すら、十分に牧草として利用できる。あまり手をくわえないでも、たいていの土地が牧場になる。そうした風土的条件を比喩的に表現したのが「ヨーロッパには雑草がない」である。（三〇ページ）

ヨーロッパの肉食率が古くから高かったのは、もとはといえば、日本では考えられないほど家畜飼育の容易な、牧畜適地だったからである。そして、ヨーロッパを牧畜適地にしたのは、要するに自然に生える草類が家畜飼料にならないほど徒長するのを妨げる、独特の気候条件であった。では、ある意味では植物の生育に不適なそうした気候条件は、穀物生産に対してどのように働きかけたのであろうか。（三三ページ）

ここで、まず考えなければならないのは、日本では穀物生産の主役が伝統的に水稲であったのに、ヨーロッパでは麦類であったという事実である。このことは何でもないようで、実は重大な意味をもつ。（三三ページ）

水稲の栽培には、生育期に三か月以上摂氏20度を越す気温と、年間で１０００ミリを越す降雨量が必要であるが、ヨーロッパでこのような条件を満たすところはほんのわずかである。水稲栽培が可能なのは、本来的には、役に立たない雑草を繁茂させる、暑熱と湿潤のはげしい所だけである。（三四ページ）

だから、ヨーロッパ人の肉食率が高いのは、考え方によっては、けっしてかれらがめぐまれていたためではない。風土的条件が、かれらに穀物で満腹することを許さなかったのである。穀物であれ、畜産物であれ、主食・副食の別なしに口にすることが、かれらの生きる唯一の道だったのである。（三六ページ）

このような鯖田の文章を読んでいた筆者の目にとまったのが第三章「人間中心のキリスト教」で、その章には「動物を殺す動物愛護運動」「人間と動物との断絶」「伝統的な人間中心主義」「キリスト教の結婚観」等のテーマが続いていたが、そろそろこの小論の本筋に入ろう。実は、『肉食の思想』の第一章は「ヨーロッパ人の肉食」がテーマで、次のような記述があった。

日本人の食生活は、ここ十年ほどのあいだに、いちじるしく洋風化したといわれる。（中略）しかし、この食生活の洋風化はあくまでも洋風化であって、日本人の食事がヨーロッパ人とまったく同じになったのではない。「おさしみ」より「ハンバーガー」を好む若者がふえ、休日にはアベックや家族づれでレストランがにぎわったとし

ても、それだけで結論はだせない。わたしたちがレストランでお眼にかかるような西洋料理を、日常、ヨーロッパ人が口にしていると思ったら、とんでもないあやまりである。かれらの家庭料理がどんなものか、もっと具体的に知る必要がある。（三ページ）

と述べて、竹山道雄（東大教授・『ビルマの竪琴』の作者）の『ヨーロッパの旅』（新潮文庫一九六四年）に書かれている次のようなパリでのできごとを取り上げている。

かれは、戦前から何回もヨーロッパに行っているが、戦後パリを訪れたとき、旧知の人たちは、かれがやせおとろえているといって驚いた。当時竹山の年齢は五十歳を越していたので、やせていても日本人としては別にどうということもなかったかもしれないが、フランス人にはそうはいかなかった。昔のように太らせてやるという理由で、たちまち半強制的にある家庭にひきとられた。そのときのようすを竹山はつぎのように書いている。

…こういう家庭料理は、日本のレストランのフランス料理と大分ちがう。あるときは頸で切った雄鶏の頭がそのまま出た。まるで首実検のようだった。トサカがゼラチンで滋養があるのだそうである。あるときは犢の面皮が出た。青黒くすきとおった皮に、目があいて鼻がついていた。これもゼラチン。兎の丸煮はしきりに出たが、頭が崩れて細い尖った歯がむきだしていた。いくつもの管がついて人工衛星のような形をした羊の心臓もおいしかったし、原子雲のような脳髄もわるくはなかった。……

あるとき大勢の会食で、血だらけの豚の頭がでたが、さすがにフォークをすすめかねて、私はいった。

「どうもこういうものは残酷だなあ――」

一人のお嬢さんが答えた。

「あら、だって、牛や豚は人間に食べられるために神様がつくってくださったのだわ」幾人かの御婦人たちが、その豚の頭をナイフで切りフォークでつついていた。彼女たちはこういう点での心的抑制はまったくもっていず、私が手もとを躊躇するのをきゃっきゃっと笑っていた。

「日本人はむかしから生物を憐れみました。小鳥くらいなら、頭からかじることはあるけれども」

こういうと、今度は一せいに怖れといかりの叫びがあがった。

「まあ、小鳥を！あんなにやさしい可愛らしいものを食べるなんて、なんという残酷な国民でしょう！」

私は弁解の言葉に窮した。これは、比較宗教思想史の材料になるかもしれない。（四ページ）

このような、竹山がパリ滞在中に経験した非常に興味深いやりとりについて、鯖田は次のように述べている。

では、動物愛護と動物屠殺の同居するヨーロッパ特有の条件から、どのような思想的方向が生まれたのであろうか。

予想される解答は一つしかない。人間と動物のあいだにはっきりと一線を劃し、人間をあらゆるものの上位におくことである。そうすれば、いっさいの矛盾は解消し、動物屠殺の矛盾は解消し、動物屠殺に対する抵抗感もなくなるはずである。歴史的にみて、こうした思想的立場をもっとも鮮明にうちだしたのが、実はキリスト教である。パリのお嬢さんが、竹山にむかって、「牛や豚は人間に食べられるために神さまがつくってくださった」といっているのは、そのなによりの例証である。（五八～五九ページ）

そしてその後にも、「キリスト教はきわめて人間中心的な宗教である」（六四ページ）・「人間も人間の住む地球も万物

の中心でなくなることが、当時のヨーロッパ人に堪え切れなかった」(六七ページ)・「人間の尊厳を維持するために、動物との断絶をあらゆる面で強調せざるをえなかったヨーロッパ的条件は、キリスト教以上に根が深い」(七九ページ)と、非常に興味深い記述がみられるが、ここでは前掲の竹山が体験した「パリのお嬢さん」の「牛や豚は人間に食べられるために神さまがつくってくださった」という言葉に注目したい。たしかに『創世記』(旧約聖書)には、

そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。そこで神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた。「ふえかつ増して地に満ちよ。また地を従えよ。海の魚と、天の鳥と、地に動くすべての生物を支配せよ。生きて動いているものはみな君たちの食糧にしてよろしい」(第一章)

のように示されている。彼女の言うとおりである。ただ、これは聖書に示されているから肉食することに抵抗がなかったということを意味するのでなく、反対に牧畜民族としての生活から形成されたのが『創世記』の記述と考えなくてはならないであろう。

もちろん、言うまでもないがキリスト教はヨーロッパで始まった宗教ではない。「もとはヘブライ人の民族宗教であったユダヤ教から発展したものであるが、ヘブライ人もまた牧畜民族であり、人間と動物のあいだに一線を劃すことはどうしても避けられない要請であった」と鯖田は指摘している(『肉食の思想』五九ページ)。

このような考え方は、日本人の動物観とはかなり異なっているが、彼らの意識の背景にはヨーロッパ(イギリスの清教徒が移住して建国したアメリカも含む)と日本の自然環境の相違(小麦文化と稲作文化)が大きく影響していると考えられるのではないだろうか。動物観にとどまらず、鯖田の分析はさらに続く。第四章は「ヨーロッパの階層意識」というテーマで、次のような強烈な記述が続いている。

あらゆるものの中心になる人間は、もともと、キリスト教徒たるヨーロッパ人にかぎられる。したがって、かれら以外は、たとえ二本の手と二本の足をもっていても、人間の範囲から除外される可能性が十分に存在する。おそらく人間と動物を区別する断絶論理が、同じようなきびしさで、ヨーロッパ人とそうでないものを分けへだてるのであろう。（八三〜八四ページ）

「ほんとうの人間」であるためには、単にヨーロッパ人であるだけでは十分でない。キリスト教徒であることが必要であった。こうして、ユダヤ人をも劣等人間と見なす立場が幅をきかすことになる。（八五ページ）

その上で鯖田は「ヨーロッパの人間中心主義が伝統的に非ヨーロッパ人やユダヤ人を除外するもので、現在でもその痕跡がなくならないとすれば、その前提となる人間と動物の断絶を強調する立場は、実は両刃の剣である。それは一方で人間的なものを追求する原動力になると同時に、他方では、人間を完全人間と劣等人間にわける、とぎすまされた断絶論理を産みだすのである。とすれば、わたくしたちは、もはや、ヨーロッパ思想の根底を人間中心主義に求めるだけでは安住できない。キリスト教徒たるヨーロッパ人とそうでないものとを、あたかも人間と動物の間柄のようにきびしくへだてざるをえない断絶論理が、ヨーロッパ思想にどのような色あいを与えているかを、ここであらためて検討しなおす必要がある」と述べて、日本とヨーロッパの「支配者の意識」を比較している。

過去の日本で名君とたたえられた人物は、ほとんど例外なしに、質素な生活の実践者である。倹約であることを支配者の資格にかかげる政治論も多い。実際にはぜいたくのかぎりをつくした支配者も大勢いるが、そのよう

な人物はけっして理想化されたりはしなかった。

ヨーロッパでは、このようなことはまったくといってよいくらい見あたらない。それどころか、騎士物語などを読むと、些細なことにこせこせしないで、どんどん浪費することが、むしろ、支配者たるものの美徳のように扱われている。たとえば、名君のほまれ高いフランス王ルイ九世（一二二六～一二七〇）のごときは、あるとき、側近のジョアンヴィル卿につぎのような忠告をしたと伝えられる。「君はもっとよい衣服を身につけなければならない。そうすれば、君の奥さんは君をもっと愛し、君の召使いは君をもっと尊敬するようになろう」。このような忠告の背後にあるのは、質素であることは逆に支配階級の体面をけがす、との立場である。（九二ページ）

4、環境問題と仏教思想（これまでの筆者の発表）

筆者がこのような鯖田の分析を読みながら考えたことは、何世代にもわたって住み続けてきた環境によって形成された意識を短期間で変えることの難しさである。実際に、極めて深刻な地球温暖化への対応に温度差があることがそれを物語っているだろう。

これに対して日本はというと、キリスト教とは異なった自然観で暮らしている。筆者が初めてこうした問題について発表したのは大学院に入学したときで、『仏教学研究会年報』第五号（駒沢大学大学院仏教学研究会一九七一年）で、タイトルは「自然界の一員としての人間の再認識　――生きている仏教――」であった。その中で、

前々から私は、自然界のきわめて複雑で精巧なるシステムの一員としての人間ということに注目していたのであるが、自然界がそのシステムを破壊しようとするものに対して、手痛いしっぺ返しをしてきたことは歴史的にも明らかである。

と述べたが、そこに中村元・東大教授の「生命ある者どもの中で、人間が最もすぐれているというのは、人間の独断ではなかろうか。そのように客観的に断定できる根拠は何もないのである」という指摘を紹介した。

それに続いて『教化研修』第三三号（曹洞宗教化研修所一九九〇年）に、第二九回教化学大会発表要旨として「フロンガスと仏教　――環境問題に対する仏教的発想の必要性・序説――」と題する小論を発表した。その中で一九八九年三月十九日・二十日に放送されて大きな反響を呼んだ、ＮＨＫ特集「地球汚染」を取り上げた。

番組で取り上げられた問題の主なものは

①フロンガスがオゾン層を破壊し、紫外線が増加する問題（皮膚癌・白内障などが増える。植物の成育が阻害され、食糧生産に大きな影響が及ぶ）

②二酸化炭素の増加による地球温暖化の問題（自然環境が激変する。作物の成育も大きく変化し、大干魃の恐れ。生態系が変わり、伝染病が激増。海水面が上昇し、都市が水没）

③ＰＣＢ（ポリ塩化ビフェニール）やＤＤＴなどの化学物質による海の汚染の問題（奇形の発生率が高まり、生物の生存が脅かされる。魚や海草類を食べることができなくなる。食物連鎖によって、人間の体にも異常が発生する。酸性雨によって森林が枯れる恐れ）

などで、人類の生存そのものを揺るがしかねない状況に対し、早急に対策を立てるべきだと警告していた。

今から三十年も前にこうした環境問題が指摘されていたのだが、その後も多くの人の問題意識は高まっていない。その論文で筆者は次のように述べた。

私たちは、自分さえよければという、自分本位の（企業の利益優先・生活の便利さ優先）の考えがなかなか捨てら

れない。そのために、人に対しても物に対しても、自分の都合のよいところだけを取って、他の部分は見えないところに捨てておくことがよくある。高度経済成長の時代には、特にそれがはなはだしかった。例えば家庭から出されるゴミや産業廃棄物は、お金をかけて処理したり、回収して再生・再利用したりしてもコストが高くなって割にあわないという理由から、海中や土中に捨てておかれた。（中略）

こうした現状を見ると、私は公害の被害者意識を持つことよりも、一人一人の生活意識を問題にする方が、より本質的と思えてくる。そして、二つのことを考えずにはいられない。その一つは、地球の生態系は複雑に関連しているから、自分と他人とを別々のものとして切り離せないということである（これは自他不二の証明である）。つまり、フロンガスの問題から、自分だけの利益を得ようとすることが幻想であることが分かってくる。被害者とばかり思っていた自分がじつは加害者にもなっている。

そして最後に、

わたしは、自他不二・縁起・少欲知足・無常などを説く仏教こそが、環境問題に対してもっと本質的な発言ができると思っている。（中略）環境汚染それ自体の解決は、科学的な方法を見つけ出して対処するほかはないが、その基盤として、科学を扱う人間の心、そして私たちの日常生活の姿勢が強く問われるのはこれからである。そこにこそ仏教の世界観を説くことが重要になってくるものと思われる。

と締めくくった。

そして同じ年に発行された『宗教学論集』第十六輯（駒沢大学宗教学研究会一九九〇年）には「仏教思想から見た環境問題　――キーワードとしての「自他不二」――」を発表して、環境汚染の根底にある問題点の一つを次のように指摘した。

問題は、私たちが「自分は自分であり、他人は他人である」と考えている点にある。すべてのものは何らかの関わりの中で存在し、それ自身だけで単独に存在するものは何もない。公害問題・環境汚染でさえ、加害者はその一方で被害者にもなる。両者を一方づけることは不可能で、どんなに地球の遠くで起こっていることでもめぐりめぐって我が身に及ぶのであり、自分一人だけ保護されることはありえない。

他をおしのけた自分だけの利益というものは、一時的には得られるかもしれないが、もともと幻想にしか過ぎない。ただ、私たちはそのことがなかなか理解できない。現在の環境汚染問題の本質は、「Aが非Aによって存在する」ことを忘れた私たちの心にある。そうした考えをしっかりと認識するためにも、仏教の思想を声を大にして主張する必要がある。そのような考えに基づいた産業構造や社会の仕組みを確立してゆかなければ、やがて、私たちの社会は完全に行き詰まってしまうであろう。

と、仏教の世界観や人間観が地球規模の環境問題解決への方向性を示していることを指摘し、最後に元・東海学園女子短期大学学長の林霊法氏の「地球保全には仏教的世界観が必要である」を紹介しておいた。（註六）

三番目に紹介する論文は「地球の環境問題と仏教　――ゴミに教えられる人間の生き方――」（『教化研修』第三五号・

曹洞宗教化研修所一九九二年）で、第三一回教化学大会で発表したものである。そこでは、一九九一年三月に開催された「修証義公布百周年記念国際シンポジウム・地球の未来と禅仏教」で取り上げられた「地球規模で進行している環境問題に対して曹洞宗は何ができるか」を紹介したが、その中で筆者は「発想の転換」が必要なことと、「問題解決の難しさ」を指摘した。

現在、世界各国で地球の環境問題が盛んに論じられているが、なかなか焦点が定まらない。そこには、国によって利害関係が異なることもあろうが、何よりも、地球環境問題は余りにその守備範囲が広いために、実態がなかなか目に見えてこないためである。地球の温暖化の問題をとってみても、私たちが持っているデータは少なすぎる。それが問題の認識を薄くしている。

今、「地球にやさしい生き方」というタイトルで、身近なところから環境問題に取り組もうという動きが盛んになってきた。それらの内容を見ると、多くは仏教教団の生活規定に見られるものである。私たちからすれば今更という感がないわけではないが、それは逆に日常生活に仏教的な発想が必要とされていることの証拠でもある。そのような意味で、日常生活をベースにしながらの仏教の世界観を説くことが求められているのである。

筆者はこうした発表を行った後で、『禅の友』（曹洞宗宗務庁一九九三年三月号）に「環境破壊と仏教」の原稿を執筆した。その副題は「一人だけの幸せはありません」で、副題が示すように、私たちは自分以外の人や動物や植物と直接・間接に関わりながら生きている、というよりも「生かしてもらっている」ことを忘れてはならないのではないだろうか。そこで、原稿の後半を次のように締めくくった。

環境破壊の難しいところは、加害者と被害者とをはっきりわけることができない点にあります。もちろん、産業廃棄物のように加害者が特定できるものもありますが、私たちの豊かな生活そのものが環境を破壊していることも否定できないのです。

大量の汚染物質は、空気や海水の流れにしたがって、国境をこえて広がっていきます。今や世界中の海と空が、その影響をうけています。人が住んでいないため、世界で最もきれいだといわれていた北極でさえ、化学物質による汚染が確認されています。

地球という閉鎖された世界では、加害者も被害者になるのです。地球の反対側で発生した汚染も、やがては自分のところに影響してきますから、「私だけは安全」という保証はありません。

このまま進むととりかえしのつかないことになるのではないかと、多くの人びとが気づき始めました。なかなかよい考えが浮かびませんが、仏教にはこの袋小路から抜け出すヒントがたくさんあるのです。例えば、そのひとつに「自他一如」という教えがあります。

これは、自分と他人とは別のものとして対立しているのではないという意味です。環境汚染は加害者も被害者になることに気がつけば、自分以外の人や資源を犠牲にした「一人だけの幸せ」は幻想にすぎないことがわかります。

みんなが幸せになるためには、自分以外のあらゆる人やものを大事にしなくてはなりません。それは、大量生産・大量消費による使いすてをやめることなのです。

5、求められる仏教思想からの発信

これまで述べてきたように、地球上にはさまざまな生きものが存在している。前にも示したようにその数はおよそ七百万種類といわれるが、その中で名前がつけられて生態がわかっている動物や植物は三分の一ほどしかないそうである。これは、どのような生き方をしているのかだけでなく、人間の生活にどのように関わっているのかがわからない生きものが多数存在することを意味している。人間の生活に関するさまざまな分野での研究が進んだ現在は、蓄積された知識や技術は膨大な量になるだろうが、それでも「わかっていること」よりも「わかっていないこと」の方がはるかに多いのである。

筆者は子どもの頃に「スズメは田んぼの米を食べる害鳥だけれど、ツバメは農作物に害を与える虫を食べる益鳥だから大切にしなさい」と教えられた。しかし、現在ではスズメも害虫を食べることがわかっている。また、フロンガスがオゾン層を破壊することから代替フロンガスに切りかえられたが、フロンガスが開発された当時は冷蔵庫やエアコンに不可欠な物質として脚光をあびたのではなかったか。そして、現在はその代替ガスでさえ温室効果ガスとして問題視されている。

このような事例は枚挙に暇がないが、それは上述したように「わかっていないことが山ほど存在している」ことを如実に物語っている。だからこそ、私たちは目の前の現実としっかり向きあわなくてはならないのである。仏教には「四諦」という教えがある。説明するまでもないだろうが、それは苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つである。生きる上でのさまざまな苦悩を解消するためには

①現実から目をそらさないでしっかり向きあうこと

②そしてその原因を見つけること

③その原因を取り除く方法を考えること
④見つけた方法を確実に実行すること
というプロセスの重要性が示されている。

短絡的に、自分に都合がよいように現実を受けとめるのでなく「現実としっかり向きあうこと」は非常に重要であるか。筆者が仏教思想に関心を持つようになったきっかけを与えて下さった森先生は『親子のための仏教入門』(幻冬舎二〇一一年)という著書で、「仏教とは宇宙の真理である」という見出しをつけて興味深い説明をしている。

仏教とは、仏さまの教えです。また、同時に、仏になるための教えでもあります。つまり、それを聞いて実行すれば、人間が仏になることができるのです。これは、苦しんでいる人々からその苦しみを取り去り、また人間を気高くする、ひじょうに有り難く尊い教えです。

その大本は、お釈迦さまが大変な苦労をされて見つけ出され、つまり発見されて、それから説かれるようになりました。

ここで大切なことは、発見されたのであって、発明されたのではないということです。宇宙の真理はお釈迦さまがこの世に出られるずーっとずーっと前からあったのですが、それを人類のだれもが気づかないでいたところ、お釈迦さまがはじめて見つけだしてくださったのでした。(四六ページ、傍線は筆者)

小学校で習った漢字の一つに「見る」がある。実は「みる」という漢字はこの他にも「視る」「観る」「看る」「診る」のように何種類もある。厳密に言うなら、どのような「みかた」をするかによって漢字を使い分けなくてはならないはずだが、そこまで深く考える人は多くない。「地球は人間のためにある」とばかりに鉱物資源を使いまくったり

自然環境に手を加えたりしていると、どこかでその「ひずみ」が表面化してくるのではないだろうか。そのひとつが地球温暖化といえよう。地球温暖化を少しでも改善するためには、多くの「生きもの」がどのように関わりながら存在しているかについて「気づく」必要がある。

そのためには、四季の移り変わりの中で豊かな水や森林によって育まれた日本人の自然観が最も大きな力になるのではないだろうか。日本には神道思想によって守られてきた鎮守の森があり、日本人の心には自然を敬い大切にする心（八百万の神々という素朴な意識）が生き続けている。そこに仏教が伝わって「神棚と仏壇を同居させる」日本人独特の生命観が形成された。これは、キリスト教やイスラム教などの一神教を拠り所とする人々には理解できない心情ではないだろうか。だからこそ、日本人に期待されるものが大きいと筆者は考えている。（註七）

このことに関連して、筆者は最近になって鈴木孝夫（註八）の『世界を人間の目だけで見るのはもう止めよう』という著書に出会った。鈴木孝夫については大学院のころ非常勤で授業（現代国語・古典）を担当していた高校の教科書（現代国語）に「家族の呼び方」という鈴木の文章が取り上げられていて、興味深く読んだことを記憶している。何気なく話していた家族間の呼び方の奥に潜んでいる日本人の対人意識に関心を持ったので、その後に勤務した短大の研究紀要で取り上げたこともあった。（註九）

鈴木は家族間の呼び方に注目して次のように分析している。

> 家族内での会話に於いて、第一に注意すべきことは、目下の者は目上の者に向かって、人称代名詞を全く使わないという事実である。子供は父母に対して、いかなる場合にも人称代名詞は使えない。「あなた」は、尊敬を含むが故に、目上に対して使うとされることがあるが、子供が親に向かって、「あなた」とは言えない。（中略）弟や妹も、兄や姉に対して人称代名詞をまず使わない。

このような対人関係では、目下は目上に、父、母、兄、姉、といった親族概念を含む各種の呼びかけ語を使用するのがふつうである。すなわち「おとうちゃん」「パパ」「ママ」「おねえさん」「にいちゃん」などが、用いられる。

鈴木はさまざまな事例を挙げて日本の家族間における呼び方の特徴を示しているが、興味深いことは、次の指摘である。目上の者が目下に話しかけるときには一切の親族用語が使えないことだという。

弟、妹、娘、息子、子、孫、そして甥、姪といった、言葉を使う者から見て、下の地位を表す言葉及びその変形は、相手に対する呼びかけ語にはならない。「息子よ」とか、自分の娘に向かって、「今日娘はいつ帰ってくるの？」などとは絶対に言えない。兄が弟に対して「弟ちゃん遊ぼう」とも言えないのである。目下の者に呼びかけるには、相手の名前（さん、君、ちゃんなどをつけることも含む）を使うか、「お前」を使うのがふつうであろう。

こうした事例を挙げた上で、鈴木は家族間の呼び方について次のように説明している。

家族内で対話するとき、目上の者は、相手と自分の関係を、自分の立場から見ないで、子供の立場、それも一番年少の子供の立場を通して把握するのである。たとえば、二人の男子A、Bを息子に持つ母の場合を考えてみよう。彼女が年上の男の子Aに対し、「お兄ちゃん」と言うのは、彼の弟B、つまり家族の最年少者の立場に母親が自分の立場を同調させる、つまりBからAの関係を考えるわけである。当然BはAを「兄」用語で呼ぶのであるから、母親もAを「兄」用語で呼ぶことになる。

同様にして、夫が妻を「ママ」と呼ぶときは、自分と妻の関係を、自分の立場から直接に把握しないで、一度子供の立場に同調する。子供から見た彼の妻の関係は子→母関係であるから、子供は当然彼女を「ママ」と呼ぶわけである。そこで夫は妻を「ママ」と呼べることになる。

祖父や祖母がお互いを「おじいさん」「おばあさん」で呼びあうことも少なくないが、この場合の用語の基準は自分達の子ではなく、孫である。つまり一家の最年少者が基準となる原則がここにも見られるのである。（傍線は筆者）

このような鈴木の指摘から、筆者は上掲の論文の中で「家族間で一番年少の子どもの立場になって家族の呼び方を変える」という習慣は、「妻に対する夫の役割や夫に対する妻の役割、子どもに対する親の取るべき態度を意識させることにもつながるのではないだろうか」また、「兄が弟や妹に『お兄ちゃんがね』『お姉ちゃんがね』と言ったり、兄や姉の役割を演じたりしているうちに、兄や姉としての意識形成が自然に図られたことが想像できる」として、「昔から日本人が弱い者に対する豊かな思いやりの心を持っていたのは、こうした家族間での呼び方が大きく影響していたからとは考えられないだろうか」と締めくくった。

その論文で取り上げたのはそこまでであったのだが、二〇二一年二月に鈴木が逝去した後、二〇二三年四月に出版された、鈴木を追悼する『言語学者、鈴木孝夫が我らに遺せしこと』（松本輝夫著・冨山房）には、神道式の葬儀で見送られたこと（ただし、ご遺族によると先生はそれほど神道そのものにこだわっていたわけではないとのこと）や鈴木が不世出の大言語学者であるだけでなく「地球環境問題の極めてラディカルにして驚くほど早くからの先駆者」であったことが記されていた。

そこであらためて鈴木の著作を探したところ、晩年の講演録が見つかった。その書名は『世界を人間の目だけで見

るのはもう止めよう』（冨山房インターナショナル　二〇一九年）というもので、八種類の講演等が収録され、日本の自然環境の素晴らしさや地球の環境を守る必要性に対する熱い思いが随処に展開されていた。内容を要約した見出しのいくつかを示すと、

①多様性とは地球という惑星の素晴らしさの反映
②地球と資源の有限性
③アジア諸国をひとまとめで扱うのは間違い
④世界各地の多様な文化はそれぞれの環境に最適
⑤日本こそが世界を救う
⑥日本の強みは古代性を完全には捨てずに近代化に成功したこと
⑦西欧文明が破綻しつつある今こそ日本が恩返しも含めて先頭へ
⑧地球と人類が滅亡に向かっているのが現代の核心
⑨西洋基準・一神教基準はもういい加減止めよう
⑩今こそ日本古来の自然観・世界観の見直しを

等である。筆者が高校の教科書に取り上げられていた「家族の呼び方」を生徒と一緒に授業で読んだときは、日本の家族の「家族の中の最年少者を大事にする」という日本人の心情として理解したのだが、講演集を読むと、全国各地に残る鎮守の森に育まれた日本人の素晴らしい自然観に寄せる鈴木の熱い思いが感じられた。

そしてそれだけでなく、そこで暮らす人々の心に「あらゆる生命がかけがえのない存在である」ことを伝えた仏教の生命観と相俟って、世界に類を見ない日本人の生命観が形成されてきたと感じた。地球温暖化が深刻な今こそ、それを世界に向かって発信しなくてはならないはずで、それが日本人に課せられた役割ではないかと筆者は考えている。

6、地球の未来を守るために重要な仏教保育

筆者は以前（曹洞宗総合研究センター第十回学術大会）に「〈もったいない〉の心を育てる　――食育と仏教保育からの出発――」と題する発表をおこなった（『教化研修』第五三号所収　二〇〇九年）が、その中で、「もったいない」という言葉を聞くことが少なくなったような気がすると次のように指摘した。

古くから、日本では「おかげさまで」「ありがとうございます」と並んで「もったいない」という言葉が日常的に使われてきた。それは、人はお互いに関わりあって生きている、自分が多くの人やもののお陰で生かしてもらっている、という意識を持っていたからであろう。しかし、最近はどちらの言葉もあまり使われなくなった。これは、節約したり大切に扱ったりする気持ちが薄れてきたことを象徴しているのではないだろうか。そして、このことは「もの」の問題だけにとどまらず、人の〈いのち〉を大事にしないことにもつながっていく。そのことは、簡単に人の生命が奪われてしまう最近の社会情勢を思い浮かべればすぐに納得できよう。そこで、もう一度「もったいない」の心を育てることがきわめて重要な意味を持っていると考えるのである。

発表では「もったいない」という言葉の素晴らしさを「環境保護の合い言葉にしよう」と、国連の場で世界に発信したケニアの副環境大臣ワンガリ・マータイさん（二〇〇四年にノーベル平和賞を受賞）の活動や、保育活動における食事や野菜栽培を通じた「生命を大切にする心を育む活動」等を紹介した。一般には「子どもは何もわからない」と思われがちだが、そうではない。筆者が関わっているこども園の園児（〇歳児～五歳児）を見ても、非常に感性が豊かであることが感じられる。

言いかえると、子どもは（保育者を含めて）大人（保護者）の行動をじつによく視ているだけでなく、その奥の「心も感じ取っている」ことは間違いないから、重要なことは、子どもと日常的に接する「（保育者を含めた）大人（保護者）がどのような心で生活しているか」ということである。子どもを人として育むのは「言葉による教育」よりも「心による教育」であることを忘れてはならない。現代社会では早期の知識教育に関心が寄せられる傾向が強いが、人を「本当の人」に育てる要点は「子どもの周囲で生活している人」の生き方ではないだろうか。

その意味で、地球上のあらゆる生きものが相互に関わりあいながら生きている（直接であるか間接であるかを問わず）ことは間違いないのだから、感謝と思いやりの気持ちで「人も動物も植物も大切にする」という仏教の生命観を子どもの心に育むことこそが、未来の地球を守るために非常に重要なことと考えられる。そして、これは日本の伝統的な自然観に育まれた私たち日本人だからできることで、特に仏教の生命観を広く世界に発信することに大きな意味があるのではないだろうか。

（註一）「世界平均　最も熱い年に」産業革命より一、四度上昇（読売新聞　二〇一三年一二月一日付け）

（註二）国連気候変動枠組み条約事務局は十四日、各国が独自に策定した温室効果ガスの排出削減目標を達成しても、二〇三〇年の排出量は一九年比で二％減にとどまるとの報告書を公表した。温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」では、産業革命前と比べて気温上昇を一、五度以内に抑えるのが世界目標で、実現には一九年比四三％の削減が必要だが、大きな隔たりがあることが浮き彫りになった。（読売新聞　二〇二三年十一月一五日付け）

（註三）当時は日本の高度経済成長期で、水俣病・イタイイタイ病・四日市ぜんそく等の環境汚染による健康被害が全国的に深刻になっていた。

（註四）読売新聞には、「干ばつ・洪水　故郷捨て『気候難民』増加社会」という見出しで、世界各国で温暖化によるとされる大干魃や洪水で生活環境を奪われた難民の現状が報告されている。（二〇二三年十一月二九日付け）

（註五）兵庫県に生まれ東京帝国大学卒業。大正・昭和期（一八八九～一九六〇）の哲学者・倫理学者。『ニイチェ研究』『ゼェレン・キルケゴオル』を著すなど、初めは西洋哲学を研究していたが、その後、日本の古代文化への関心を高め、大和の旅行記『古寺巡礼』は奈良飛鳥の古寺に祀られた仏像の美しさを伝えたもので、今日の古寺めぐりブームの先駆けになった。また、京都帝国大学助教授時代のドイツ留学経験をもとに執筆した『風土――人間学的考察――』は、東アジア、南アジア、西アジア、ヨーロッパ各地域の自然環境と、そこで暮らす人びとの価値観や考え方との関連について考察したものである。和辻は日本人としての立場から、人間と文化との関わりを背景にした独自の倫理学を体系化した。京都帝国大学教授・東京帝国大学教授を歴任。学士院会員。日本倫理学会初代会長。文化勲章受章。

（註六）林霊法著『法然浄土教と現代の精神的状況』（百華苑　一九八五年）

（註七）このことに関しては、梅原猛（国際日本文化センター所長）も「一神教から多神教へ」の中で、「人間の自然征服の時代はおわった。自然を神としたかつての時代に回帰すべきだ」と述べている。（『中央公論』一九九〇年二月号）

（註八）一九二六年東京に生まれる。慶應義塾大学文学部卒業。専門は言語生態学・言語社会学。慶應義塾大学言語文化研究所教授、米国イリノイ大学アジア研究センターおよび言語学科客員教授、米国ェール大学大学院客員教授、フランス高等社会科学研究院客員教授等を歴任。一九七二年に四七歳（最年少）で文化庁国語審議会委員。一九八八年に慶應義塾大学言語文化研究所所長。一九九〇年に退職。著書は『ことばと文化』（岩波書店）、『武器としてのことば』『閉ざされた言語・日本語の世界』（新潮社）、『人にはどれだけの物が必要

か』（中央公論新社）等多数。岩波書店から『鈴木孝夫著作集』（全８巻）が出版されている。二〇二一年逝去。

（註九）拙稿「家族の呼び方と子ども観について」（『育英短期大学研究紀要』第二四号　二〇〇七年三月）

（さとう　たつぜん・仏教文化研究所客員研究員・育英短期大学名誉教授）